

鎌田茂雄著「正法眼蔵・随聞記講話」講談社学術文庫 1987年4月10日刊を読む

悪口をもって人を責めるな

1. 夜の坐禅が終わった後で、道元はつぎのような法話をされた。口ぎたない言葉で僧を叱り責めたり、また過失をあげてそしってはならない。たとえ、どんなにその僧が悪いからといって、道理にかなっていないからといって、理由なく憎しみそしってはならぬ。どんなにその僧が悪いからといっても、僧が4人集まっていれば僧団を作っているのであって、国の重宝であり、最も^{きえ}帰依し、尊敬しなければならないものである。
2. 一山の住持や長老といわれる人であっても、師匠、善知識といわれる人であっても、弟子が不当なことをした場合には、慈悲心、老婆心をもってよく教えて、正道に誘引しなければならない。その時、たとえ打たねばならない者を打ち、叱り責めねばならぬ者を叱っても、相手の過失をいいたて、悪口をいおうとする気持ちを起こしてはならない。
3. 亡くなった私の師匠である^{てんどうによじょうおししょう}天童如浄和尚が天童山に住持をしていた時の話であるが、僧堂で多くの僧が坐禅をしていた時、居眠りわしている僧を戒めるために、自分のはいている履物で打ち、その非を叱ったが、多くの僧たちはみな打たれることを喜び、その師の行為をほめたたえたのである。
4. ある時、如浄は法堂にのぼって説法したついでにつぎのようにいわれた。
「自分はすでに年をとったから、大衆と一緒に修行するのはやめて、草庵に住して老後を養っていればよいのであるが、自分は衆僧の指導者として、お前さんがたの迷いを破り、仏道を教えるためにこの天童山に住持となっている。だからこそ修行を怠ったり、道理にかなわぬ行いをする者に対して、^{かしやく}呵責の言葉をいったり、竹篋で打ったりするのである。これは大へんつつしまなければならぬ恐るべき行為であるが、しかしこれは仏に代わって行っているのである。どうかお前さん方、慈悲をもってこれを許して下さい」
という、衆僧はみな涙を流したのであった。
5. このような慈悲心、このような気持ちをもってこそ、始めて大衆を教化することができる。住持、長老であるからといって、むやみやたらに大衆を支配し、自分の小僧のように思っ^{かしやく}て呵責するのはあやまりである。ましてその資格もなく、その立場ににもない者が、人の短所をいい、他人の欠点をそしるのはあやまりである。よくよく気をつけなければならない。

6. 人の欠点を見て悪いことだと想い、慈悲心をもって教化しようと思ったならば、その人が腹を立てないように配慮して、第三者の他人のことのようについて教え導かなければならないのである。

P57 ~ P59

<コメント>

「正法眼蔵・随聞記講話」は道元のことばをそのまま筆録したものとされている。私は、今年の1月元旦に栃木県大田原市黒羽くろばねの「大雄寺」を訪ねた。その「大雄寺」では、1月10日から全国で公開される予定の道元の一生を描いた映画「禅」の撮影が行われたそうだ。難解といわれる道元の「正法眼蔵」をこの「随聞記」や映画「禅」などを参考にしながら、少しずつ日々の生活の中にしみ込ませることが必要な現代と考える。

— 2009年1月6日林明夫記 —